

# 風水篇

前提知識として、自式風水論について以下にまとめておくので参照されたい。

\* 「風水」という用語に関しては、歴史的に定着しているこの言葉を用いた。地形や方位を検討する学問という事である。

風水とは万物自然の摂理を現すもの。万物を五つの要素をもって示す。インドや仏教等で「五大」と呼ばれるものと同じであるが若干異なる。意味付けも私（非私）自身で行なっている。

火、土、水、風、空

火はエネルギーを表す。

土は固体を表す。

水は液体を表す。

風は気体を表す。

空は時空を表す。

ところで、中国風水では五行として「木火土金水」であるが、私は五大を基本に据えた。五大だと「土」ではなく「地」だが、厳密には地には液体や気体も混在しており、上方にこの要素が配される場合もあるので（例えば超高層ビル等）、「地」と表現するとどうしても大地の印象が強いので「土」としている。後に論ずる天界の配置でも「土」が上側に来るので、「地」が上方に配されると己が地底に居るかのような印象を持つ。

同じく五大と呼ぶ事とするが、日本真言密教では「地水火風空」に「識」を加えて六大としているが本論では唯心論の見解を否定するので、己の「識」という意味合いにおいては「空」の内に含まれる。「空」には時空（時空間）という意味と”実体が無い”という意味もあり、宇宙の原理としてもそのようだし、これは仏教等の「空」の意味にも類似する所である（ここでは、己を「空」としてよい、という事）。

\*本論においても、上記五大に加え「識」を設けるが、これは「仮想の時空間」という意味で、手短に言うとは現代の写真やテレビ、CG等の仮想の空間を指す。他述する。

まず最初に、自然とは宇宙とは何かと考えると、一点に五大が重なり合っている状態だと五大ならざる未分の状態であろう。つまり、五大が五大成らしめるには、通常我々が捉えている自然の事だが、空間が必要なのだ。空間があるからこそ五大が五大として分化して存在する。

火	エネルギー
土水風	物質
空	時空間

つまり、五大を配するという事は空間の広がりをも認める事に他ならず、故に方位の概念が生ずる。東西南北と中央で五方となり五大と数が一致する。自然には各々が分化して存在しているので、配するは理に適う。

\* 五大ないし五行の要素を各方位に配する思想はインドや中国の風水に見られる。他の方位は（例えば北東）基準の四方位に従う形で示される。

ここで、どの要素をどの方位に配するかという議論になるが、宇宙の原理としてその中心は「己」である。ゆえに、中央に己を配する事になるのだが、自身とは五大の側面であるが、ここでは「実体が無い」という意味において「空」が自己として中央に配されるに適する。例えば「水」を己としておいてもそれは一側面でしかなく、何故他の要素ではないのかそれを選んだのかの説明がつかない。時空という意味ではなく、ここでは「実体がない」という意味である。

\* 仏教では「己を洲とせよ」、ヒンドゥー教の「ヴァーストゥ・プルシャマンダラ」「梵我一如」等に類似の思想が見られる。

梵我一如では大宇宙と小宇宙の合一が摂理という話だが、宇宙の中心に己が配される（己が宇宙）のは宇宙原理から見てもそのようであり、プルシャ曼荼羅だと体が寝ているが、寝ているという事は即ち体が四方位を向いている事に他ならない（地に寝ていると体のどこかが四方を向いている）。人体が立っている状態だと四方を向いてはいないが（頭の方向が高さ。四方だと正面方位等表現が変わってくる）、曼荼羅では方位から見て寝ている状態である点に着目されたい。

\* ちなみに立っている、“高さ”を用いての表現は空海の立体曼荼羅や五輪塔に認められる。

ゆえにまとめると、中央の小宇宙は「不動」という事になる。この状態において、中央に寝ている状態の人体形の頭側はこちらの方位、足の方はあちらの方位という風に東西南北の概念を有する事になる訳だが、人体形ゆえに頭側が”上”方で、足側が”下”方という概念もここで生ずる。したがって、平面的であると同時に高さの概念も既にこの時点で有している。

\* 不動の場に坐禅等の思想が関与する事になる。

この平面上に示された人体形（宇宙）を「風水盤」と名付ける。

続いて、残りの四要素を各方に配置するが、意味があるものが有意義であり力をもつのが道理。意味のある配置、自然の摂理を示す配置とは何であろうか？未だこの時点では人体部位がどちらの方位を

向いているのかは定かではない。四大（火土水風）を東西南北どの方位に配すべきだろうか？四大を吟味する。

火

火は焚き火、灯として考えても中央から見てどの方位にも存在する。松明にしても左右どちらの手でも持てるので左右方位を特定出来ない。

土

固体なので、地として下側で踏みしめている下方に存在する印象を持つが、岩が山が我々の側面に在ったりと先に盤が取り込んだ高低の上・中・下（人体形で頭・胴体・足に該当）の概念では決められない。

水

池、川、海とどの方位にも存在し、特定の方位に川などと「水」の方位を決められない。

風

基本的に人体に対して左右から吹き抜けるもの。ダウンバーストなどという現象もあるが、人体に風が上下方位から吹きつけてくるのは人間が感得している自然現象として通常ではない。左右方位に関しては特定出来ない。

このように、四大の各方への配置を考えあぐねるが、中央は不動である事を思い出し、不動者に恩恵をもたらす自然要素の構成を再考してみると、

火

松明は不動者でも恩恵に預かれるが、否、厳密に言うとは持たねばならぬので、持つと言う動作を行わなければならない。焚き火ないし諸々の炎だと遠い所で燃えている場合不動者に恩恵しない。ここで自然界の炎といえば太陽なので、「火」を太陽（という炎）とすると不動中央に影響する。さらに作用するのは日が出ている日中の間、厳密に言うとは夜でも温度を保っているため、効用を最大限にもたらすのは日が出ている間となる。東から昇って西に沈むという方位観を齎す。又、太陽とした時点で、盤において時間概念が生ずる。もっとも、空間を定めた時点で時空一体より時間をも表していると考えて矛盾無いが、風水としてはここで時間概念が生ずるものとする。

土

側面や上部の「土」が作用するのは特定の状況下においてのみ。自然界の不動者に作用している「土」ならば大地となる。下方。

水

雨は不動者に作用する。上方から。

風

不動者に対して、左右どちらからか吹き抜けるもの。

これらを踏まえて検討すると、「火」は東に配され又は、東”から”昇って沈むので、東を中位とし、昇った先を上方と捉える。ゆえに東西のラインが上・中・下の中位、胴体部となる。「水」は上方とし、「土」は下方に置く。「風」は「火」の対側の西となり胴体部左右線上なので矛盾無い。

この段階で我々から盤を見て上側に頭が来ている訳だが、胴体部の左右どちらが東西は未定である。と言うのも、太陽は場所によっては北にも南にも昇るから。我々から盤を上から垂直に見て、右側に東を置くと左側が西であるから、頭側が北、足側が南になるが、右側に西を置くと頭側が南になる。

さらに、ここで時間概念を再考し、太陽が昇って沈む日中夜の一連所作を盤上での「火」の要素の回転で捉えた際、時間の流れによって盤上に建設した自然界の摂理が崩れる事は無いので、要素は互いに”その位置関係を保持したまま”回転させる事とする。

\*ここで、例えば「風」が人体の下側にくるのかなどは後述する。

ゆえに、位置関係において四大要素と各方位が相対関係となるが、これを自然界の相対性と見る。例えば、太陽が我々から見て右側、上側が北方だとすると、「火」が右から上方北側に移ったのか、北方が右側に回転してきたと捉えるのか、位置関係が相対的ということである。重力の大きい太陽の周りを地球が回転していると考えるのが一般的だが、地球を中心としてもよい。ここで、人体形の向いている方向は方位と一致している訳だから（寝ている）、東側が我々から盤を見て右側、上側を北方として捉えると、太陽は東から頭上の北を經由して西側へ沈む訳だから、盤上の火時計は時計の逆回転つまり左廻りへと回転する事になり、先の相対性より人体形はその逆右廻り側へ回転する理屈となり、中心の周りを右側に回転する方向は聖なる回転として縁起がよいので、北方を上側に定める事とする。盤はこの段階で「縁起」を取り込む。仏教四門においても北方上位の思想が確認出来る。

#### 「仏教四門出遊の解説」

省略 あとで

盤上に灯った炎が幾昼夜回転を繰り返せば、人は誰でも必ず死に至る事。真理である。

先に縁起が生じたので、盤上に「輪廻転生」という回転が生ずる事になる訳だが、そのような証明出来ぬものは信じられないと主張する者も多かろう。盤上の形が示していると言うだけに止めたい。

今までの議論での、下方に「土」上方に「水」などと言うのは、我々がつまり人間が捉えている自然現象、人間界の理屈であって、例えば上側に「土」が配される場合等だと、その界において捉えられている自然現象がそのようである事を示している。つまり、輪廻先各界を前提とすると、人間界とは別の界という話になる。

## 「四界について」

人体形の東方に「火」北方に「水」西方に「風」南方に「土」  
「人間界」を示す。

火が中位、胴体部手中に取まっているので、どちらかと言うと理知的な統制が効いている状態。

人体形の東方に「土」北方に「火」西方に「水」南方に「風」  
「下界」を示す。

火が頭部に移っているので、理知的な統制が効かない状態。足元もおぼつかない。

人体形の東方に「風」北方に「土」西方に「火」南方に「水」  
「天界」を示す。

火が中位、胴体部手中に取まっているので、どちらかと言うと理知的な統制が効いている状態。  
煌びやかな宝石のような水上の生活、上部の「土」は豪華な宮殿を連想させる。

人体形の東方に「水」北方に「風」西方に「土」南方に「火」  
「地獄界」を示す。

火で下方より燃やされているので、理知的な統制は効かない状態。左右上方の配置も不吉な印象。

\* 「どちらかと言うと理知的な統制が効いている」というのは、火を持って統制していると思ってもそれによって自身が燃えてしまう場合がある事から。

\* 人間界の内に各界の縮図が見られる様子。

\* 各界は宇宙内に取まっていると仮定するとその中を己の認識能力が転生する訳だから、宇宙の構成要素は五大であるので、五大に触発されて認識が起こる理屈はどこでも同様と言える。つまり、水上に浮かんで遊ぶは楽しみ。水中で溺れもがき苦しむは苦しみ、と言った具合に。

## 陰宅と陽宅

中国風水の言い方であり、陰宅とは墓（死者の住居）、陽宅とは住居を指す。風水とは地理、地形を読み解く学問であって、龍脈、龍穴を探し求めるもの。以上を踏まえて、先までの話より両宅について検討する。

\* 中国では、龍は水中に住み、天に昇って雨を降らすと言う。日本の仏教でも龍は尊ばれている。

四門出遊より、出家後には城が空になる理屈でこれを空城と呼ぶ。「出家」というと特定宗教の色彩を連想させるので「外出」でよい。これは出世間の理と言われるものだが、空城を陽宅風水を考え

る際の基本としている。縁起も良い。この意味においても五大配置の中心に「空」は据え置かれて矛盾は無い。

古来より住居の内に住まう人間の生業は文武による所。大雑把に言えば、「文」とは知性による生産活動の事で生計維持の術も含む。「武」とは己の身を守る、敵と戦う術である。

\*文武は人間に特有の性質ではない。ライオンは優れた武力を有しているが、文の力は人間に遠く及ばない。しかし、文を持っていないわけではない。

\*文と武、歩み寄りを考えると、文から武の流れよりも武から文の方がより低位から起こる。現代の例だと、先端科学を駆使した軍隊は完全に学問の力に依拠している。ゆえに比較宗教からすると、自身が選択した文が武を求める流れよりも、共有された武（公武、集団戦術ないし訓練。武は公の性質を有する）から。政治だと、私から公よりも公から私の流れという事になるが、国家（出生地）という意味での公は選べない。優れている国家とは。「人間はポリスの動物である」と言うかどうか。

文武の位によって人間の優劣は分けられる。優れていれば村で財を成し、または武官として引き立てられ政治中枢の将軍となる。倫理道徳として、自然の流れとして、人間はその生において幼い時分から文武を磨く事を奨励される。この文武の位、優劣を十段階に分けて風水盤上で論ずる。これが「型」である。

\*武に文が加わる事（文武）によって、武は「殺刀、不殺刀、破魔刀」と三種から成る。

\*十位に分ける思想は空海十住心にも見られる。

住居に住まう者は、世間大勢であるが、文武優劣によって二種に分けられる。ここでの住居とは政治が行われる集合体における住居であって、人里から離れた仙人郷のような崖の上で孤独に暮らしている場合の家ではない。二種に分ける理屈は、政治を行う程に優れている、適している者とそれ以外という意味で二種。優れた統治者だと政治運営が円滑、全体の利益となる。不適格者が政治実権を掌握してしまうと全体利益が損なわれる。

現代は個人主義がもてはやされるが、その善し悪しを論ずるのではなく、個人はその所属組織からは切り離され得ない。例えば、戦争を行っている国家の国民だといくらその個人が善良であったにせよ、敵国からしてみればその国の人間という色眼鏡で見られる事からも明らか。その善良人に国籍に拠る所から憎悪の念が集まる。敵国のテリトリー等場所を間違ってしまうとそこで袋叩きにあたりする。王によっては宗教者狩りが行われる場合も。

\*家は人から。街は家から…という類の思想は中国思想にも見られる。

この二段は盤の中央の空城（空）に配される。盤上十段位のうちの入門位となる。四門より入門とはその門をくぐる以前の位と捉える。

以下、そのように配しているという事であって、仏陀がこの様だったという話では全くない。さらに、初段位は文武が優れていない人間という意味ではない。入門を志す者（当初無段から）の意。在世人二種に従い二段位設ける。盤上に乗るは初段の位。

時間が流れて、次に東門より出遊（外出）し「老」を見るときは、三段の位。烈火と称す。東の「火」に配される。

時間が流れて、次に南門より出遊（外出）し「病」を見るときは、四段の位。（教育配慮より各自考えよ）と称す。南の「土」に配される。

時間が流れて、次に西門より出遊（外出）し「死」を見るときは、五段の位。百識（百説）と称す。西の「風」に配される。

\*”風説”による。「百」というのは諸子百家から。

\*私自身はお世辞を言ってもらってもこの段位まで。次段は武技が極めて達者でなければ認められぬ。

時間が流れて、次に北門より出遊（外出）し「苦」を見るときは、六段の位。水龍（雲龍）と称す。北の「水」に配される。

\*六段は皇帝位。龍が出現し北→西→南へと下降していく。龍の移動の際に（北→西）、自らは次段へ（北→東）と進む。中国において龍は皇帝の象徴。この時点で中央から外出し一周回終えた事になるが、出世間の理より一周回では在俗を以後の二周回では出離を示す。ゆえに一周目の外出とは在俗との間を行き来する者。出家したものの一時的で在家に戻る場合があるという事。

\*インドだと「転輪聖王」が当てはまる。世間の内に留まれば転輪聖王となり、出家すれば悟りを完成させる。しかし、六段の意味合いとしては外出した後に悟りを完成させるのかどうかまでは踏み込まずとも良い。

\*中国老子を参考の事。中国五行風水との接合は水龍より。

北	「水」
西	「金」
南	「土」
東	「火」
中央	「木」

”接合”とは、具体的に、上記これまでを踏まえ五行を各方位に配置し古典の解釈（本型に適合するよう）を試みる事。

经曰：气乘风则散，界水则止。  
风水之法，得水为上，藏风次之。

大则特小，小则特大。  
乘金相水穴土印木。

(…等)

郭璞『葬书』（简体中文版）：中华传世珍藏古典文库 Kindle Edition.

解釈すると、

气乘风则散，界水则止。	(散風、止水。接合により金をもって風を散じぬ様に)
风水之法，得水为上，藏风次之。	(北水最上、西風次之)
大则特小，小则特大。	(人体、形と場、宇宙)

乘金相水穴土印木。

(乗金は金剛乗、接合により乗風。相水は龍、穴土は龍穴、印木は形)

ここからの外出（二周回目）は文武二無策により円が消失するのだが…（次段へ）。

時間が流れて、出離した後に東に向かう者は、七段の位。不知火と称す。東の「火」に配される。

\*龍が出現して北→西へと流れているので、対岸の方の水上に不可思議な炎を見る者の意。七段以降の段には在俗者（不殺刀）と出離者（無刀）の二種存在する。

\*日本の国技の相撲では横綱の型は、「雲龍」と「不知火」の二種。

(不知火について天皇の話も載せる)

\*あくまでも六段を経由して二回周目の高段位へ流れるので、出家者ならばただちに上の段位という話にはならない。

時間が流れて、出離した後に南に向かう者は、八段の位。縮地と称す。南の「土」に配される。

龍が流れ落ちた地（西→南）が縮む事から。

\*水を吸い乾いた地が縮むとは、龍が天に昇らんとする昇龍の位。ゆえに盤上では天界の配置に移行するので、天地の逆転が起きる。

時間が流れて、出離した後に西に向かう者は、九段の位。波切と称す。西の「風」に配される。

波切（浪切）不動より。昇龍を斬らんとする者の意。

時間が流れて、出離した後に北に向かう者は、十段の位。不動と称す。北の「水」に配される。

波切（浪切）不動より。斬られた龍は慈雨となって天より降り注ぐ。不動の境地の意。

以上が名称と形体から考察した型となる。

「技体の合一について」

盤上での合一について論ずる。

東	「火」	点火
南	「土」	接地
西	「風」	風流
北	「水」	止水

点火とは氣勢を盛んにする事

接地とは踏み込む事

風流とは体の運びの事

止水とは相手の勢いを止める事

武技を盤（体）と合わせた。

\* 「止水」とは、四門より北方で止まらなければ周回を繰り返すと解し、又は留める事によって龍の出現を刺激す。

「五輪塔について」